

婚出女性の生家訪問

—新潟県朝日村の事例から—

蓼 沼 康 子

1. 問題と方法
2. 調査地の概況
3. 「アソビニユク」と婚姻儀礼
4. 事 例
5. 分 析

1. 問題と方法

本稿は、新潟県朝日村において行われていた「アソビニユク」という慣行の実地調査に基づく事例報告からその慣行の実態を明らかにすることを目的としている⁽¹⁾。

新潟県朝日村は、新潟県の北東部に位置し、朝日連峰を介して山形県と接している。

朝日村高根地区において行われていた「アソビニユク」とは、婚姻成立後に嫁となった女性が、一日の仕事が終り、夕食がすんだ後に毎晩のようにその生家を訪問する慣行であり、彼らはそれを「アソビニユク」と称していた⁽²⁾。婚出した女性が、婚出後にその生家を訪問することを一般的に「里帰り」というが、この「アソビニユク」という慣行の際立つ特徴であり、他の里帰り慣行と異なっている点は、その生家訪問の際に夫を伴うという点である。

伝統的日本社会にあって里帰り慣行は広くみられるものである。婚出した女性はさまざまな機会に、その生家を訪問し、ときには彼女が媒体となり婚家と生家との関係強化の役割を果たしてきた。

また、日本社会における婚姻とは女性の生家から婚家への帰属の変更ともとらえられてきた。父系的直系家族を形成してきた日本社会においては、「家」を永続させることが最も重要なこととされており、そのためには他家から婚入者を得る必要があった。他家から婚入者を迎え、跡取りを生むことを繰り返すことにより、「家」はその原理である超世代性と永続性を確保してきたのである。そのためには一子残留という相続の形態が一般的に行われ、姉家督や末子相続という多様性をみせることもあったが、日本社会では多くの場合長男である男子が相続者とされてきた。

そのために、長男である跡取りの嫁という形で他家から女性を迎え入れることにより、家は永続してきたのである。したがって、婚姻とは女性の移動・帰属変更といわれるのである。日本の家族を考えていく際に、この「家」制度からの分析が必要であり、多くの成果を残してきた。

そのために、日本の家族研究の中で女性が扱われる際には、「家」制度の中での嫁や母としての側面に限定されてきたとさえいえる。つまり、女性の一生とはいかに婚姻後に婚家でどの成員権を獲得し、その「家」に同化し、そしていかにその家の祖先となっていくかの過程としてとらえられてきた。

しかし、婚出した女性も生家に誕生し、生家の家族のメンバーとして過ごしたものであり、生家の両親との間の親子関係も存在する。一子残留により直系家族を形成してきた日本の家族は、跡取りとして残す一人を除いて他の子女は婚姻や独立により他出するものであった。その中には分家という形で独立していく場合があり、その際には分家を出した家と分家とは本文家関係として強固な繋がりを持ち続ける。本文家関係は家同士の関係として、日本の家族さらには日本社会を特徴づけてきた。分家という形で他出するのは圧倒的に男子であり、たとえば姓に象徴されるようにその家間の関係は社会の中で明白なものであった。そして、人々の記憶からその成立の過程が消えた後にもその家間の関係は存続していくのである。その一方で、婚出という形で生家から出ていく女性たちは、婚家と生家の間に関係を成立させていた。婚家にとっては戸主の妻の生家とは、深い関係をもつものであり、「近い親戚」としての認識が強い。勿論、正月や盆などの折には互いに訪問し合い、その他冠婚葬祭などの交際も行う関係にある。つまり、女性は婚姻により移動して自らの生家と婚家との間に関係を成立させるのである。

一般的にいわれる里帰りは、盆や正月などに儀礼的な形で行われることが多く、その際には婚家と生家という家同士の関係が浮き彫りにされる。しかし、里帰りといわれる慣行も多様であり、儀礼的なもの他に出産のためのもの、嫁の労働力の分配に関わるもの⁽³⁾、嫁が生家で休養することを目的とするものなど多岐にわたっている。とくに、日本海沿岸を中心に嫁の生家滞在の時間が比較的長い里帰り慣行が存在する。定期的に婚家と生家とを往復するものや⁽⁴⁾、季節的に長期にわたって生家に滞在するものがある⁽⁵⁾。

本来「家」の中においては、親と跡取りの関係が重要であり、女性は跡取りの母親になることにより「家」に組み込まれていくと考えられていた。そのために、女性と生家の親との関係は注目されてこなかった。確かに、婚出女性と生家の親との関係は、「家」という枠組みの中では世代を越えて永続していくものではない。しかし、女性の現実の生活において生家は大きな意味をもっていたであろう。ここでは、「アソビニユク」という婚出女性の生家訪問から、女性と生家あるいはその親子関係について考察してゆきたい。

2. 調査地の概況

朝日村は、歴史的には室町時代には上杉氏に属し、その後大部分が天領となり、米沢藩の管轄となつて藩政時代を経た。明治12年から郡区編成法により45村となり、同22年に10村、明治34年の町村分合令により館腰村、三面村、高根村、猿沢村、塩野町村となった。そして、昭和29年にそれらが合併して朝日村が成立した。朝日村の名前は、下川郷を貫流する三面川、高根川の河川が朝日岳にその源を発することからつけられたという。

朝日村は新潟県の北東部に位置し、東西35.8 km、南北24.9 km、面積629.32平方キロメートルである。平成5年10月末現在、総人口13,284人、総世帯数3,083世帯である。今回の調査地である高根は、人口男435人、女462人、計897人、192世帯である。世帯数の変化は少ないが、人口は青年層を中心とする転出により年々減少の傾向にある。

産業としては、三面川と高根川によって形成された肥沃な土壌に恵まれて、稲作を中心とした農業を行ってきた。また、養蚕は県下一の生産地である。朝日村はその面積の91.2%が林野であり、林業も農業とともに朝日村の中心的産業となってきた。山林の権利は生産組合の株組織になっており、その株はもともと高根にある家が所有しており、分家を出した場合には30年間共同労働に参加した後にその株を得ることができた。今回の調査地高根を含み8集落を有する高根地区は、平成2年度においては田43,190 a、畑12,068 aであり、耕地面積の規模は0.5 a-1.5 aまでのもので約半数を占めている。現在では農家のうち8割以上が第二種兼業農家であり、農業および林業の従事者は著しく減少する傾向にある。朝日村高根は村上市まで20 kmほどの距離にあり、現在では村上市に通勤する者も多い。

3. 「アソビニユク」と婚姻儀礼

朝日村高根において、昭和30年代まで行われていた婚出女性の生家訪問に「アソビニユク」というものがある。婚礼がすみ、婚家の嫁となった後に女性たちは一日の仕事がすみ、夕食をすませると夫とともに自分の生家を訪ね、生家の親たちとおしゃべりをして過ごしてきた。このように生家を訪問することを「アソビニユク」と称していた。

こうした女性の生家訪問を頻繁に行うためには、婚姻の形態が村内婚であることが前提とされる。高根集落においては、かつてはほとんどの婚姻が村内によって行われていた。この集落は隣接集落とも3 kmほど離れており、周囲を山に囲まれ最も奥深い地区である。高根以外の地域を「セケン」と言い、「セケン」に嫁にいたり「セケン」から嫁をもらったりすることは稀であったという。しかし、このような伝統的な婚姻形態が維持されていたのは、昭和30年代までであ

り、その後は通婚圏も広がりすべての点で婚姻形態が変化していった。

伝統的な婚姻においては、村内における階層差も認められ、地主層と自作・小作層の間の婚姻は稀であった。しかし、強大な地主が存在したり、あるいは他村の地主が村内の土地を所有するということはなかった。配偶者選択においても、当事者によるものと親同士によるものが存在したが、いずれの場合にも仲人をたてて交渉にあたった。高根において仲人を選ぶ際に、嫁または婿を貰う方が貰われる方の近い親戚を選んで依頼したという。それは、嫁や嫁方の貰われる側の意思を反映しやすいためである。さらに、婚姻後も嫁や嫁方が色々な相談をしやすいためからだと

言う。仲人を通して嫁方の承諾が得られると「キマリザケ」になる。婿方から酒と豆腐、二匹の魚が送られ、仲人と婿の両親、そして婿自身が嫁の家に出かける。嫁の家で祝宴がすむと、嫁を連れて婿の家へむかう。嫁はそのまま3日間泊まり、その後家に帰る。この「キマリザケ」がすむと、関係が承認されたものとなり、その後は祝言の日まで嫁は「イツリキタリ」を繰り返す。婚礼までは「キマリザケ」から1年程である。その間、嫁が婿の家の仕事を手伝うこともあったが、夕方に仕事がすんでから嫁が婿の家を訪ねて泊まってくるというものである。

そして、祝言の日には婿が嫁を迎えにゆき、嫁方で簡単な宴をもち、嫁入り道具をもって嫁と親とともに婿方へむかうのである⁽⁶⁾。婚礼は婿の家で行われ、翌日には近所や友人などを招いて祝宴が行われ、三日目にはミツメの里帰りとなり婿と嫁とで嫁方を訪ねる。

こうして婚姻が成立し、嫁は婿方に引き移ることになる。嫁の所属はこのときから婚家となっていくのである。しかし、その後も嫁は頻繁に生家に「遊びに行き」、その際にはしばしば夫である婿も伴うのである。婚入者による生家訪問は必ずしも女性である嫁の場合だけではなく、婿を迎えた場合には婿が嫁とともにその生家を訪問するのである。

4. 事 例

(1) 事例1 大正4年生れ 女性

生まれた家は9人きょうだいで、男の子は跡取りの兄と弟であとは皆女の子だった。結婚したときには、跡取りはすでに結婚していて、上の姉たちも嫁にいていた。結婚の話をもってきたのは一番上の姉の夫だった。冬、杉の木を切りに山をこえた村にいていたときに、兄が嫁入りの話があるからと迎えにきた。婿の家から嫁にほしいと言ってきていると聞いた。帰ってきて1週間でキマリ酒になった。相手のことは小さい頃からよく知っていた。よい人だったので、喜んで嫁入りを決めた。チュウニン（仲人）はきょうだいはいけないということになっているので、結婚の話をしてくれた姉夫婦ができないので姉の夫の親夫婦がしてくれた。婿の家では夫の両親とその上の夫婦も健在だった。婿の姉たちはすでに嫁にいていなかった。

キマリ酒から1年してシュウゲンになった。キマリ酒がすむと、婿も嫁も両方の家をイッたりキタリした。嫁は婿の家によく泊まってきたが、もらう方の家には嫁入りしてからのための部屋があった。嫁の家に婿が泊まるということはなかった。

シュウゲンが終わってから、2日目には親戚の女の人を1軒からひとりずつよんで、「茶、飲みにきてくれ」といって、御馳走した。3日目にはミツメといっって、実家に帰った。この時には婿もいっしょに帰って、実家で御馳走になって婿はその日に帰り、嫁は泊まってきた。

それから夜になって暇なときに、実家に遊びにいった。それでも、こっちの家でみんなでおしゃべりしているとなかなか実家に帰りづらいものだ。子どもはみんなこっちの家で、産婆をよんで産んだ。そのときにはいつも寝ている部屋で産んだ。子どもは5人生まれたが、最初の子どもが生まれた頃姑が病気になってしまったので、なかなか実家に帰れなくなった。食事の仕度などは姑のその上のおばあさんがしてくれていた。嫁はたんぼの仕事ばかりしていた。たんぼから帰るとごはんの用意ができていて、嫁は後片付けをするくらいだった。

村の休みの日というのもあって、「タウチツキアイ」といって村中が休みになった。村の女の人が大きな家にみんな集まって、それぞれに御馳走を持ち寄って飲んだり食べたりした。誰もたんぼにいけないように、たんぼに通じる村の橋の上の道をふさいだ。その頃はたんぼは女の人だけがして、男は炭焼きをしてたんぼのことはしなかった。男がたんぼに入るときは、たんぼを馬でうつときだけだった。たんぼは3反か5反くらいで、ほとんどが小作だった。自分の土地は1反くらいだった。地主は村にいて村に10軒くらいだった。

正月の2日には実家に行ったが、そこから嫁にでた人が皆集まって、にぎやかだった。娘たちとその婿と子どもたちがいっしょに帰ってくるのでとてもにぎやかだった。実家の跡取りはその嫁の家に帰っているのだから、正月には会わなかった。嫁にいった最初のときには、婿の家で3升餅をついてもらって帰った。4日の日には「レイガエシ」といって、帰るときにもらっていった餅の半分くらいのを返した。

姑が早く病気になって結婚して3年ほどで亡くなってしまったので、実家に子どもたちを連れていって、母親に面倒をみてもらって仕事をしていた。

(2) 事例2 明治45年生れ 男性

8人きょうだいの一番上の長男として生まれた。同じ村の中に同じ名前の人が出て、まぎらわしいので途中で名前を屋号のものに変えた。24歳のときに22歳の嫁をもらった。同じ村の人で、結婚の話の間にたってくれた人は母方の従兄弟だった。チュウニン（仲人）は、嫁の本家に頼んだ。結婚の話はたんぼのない時にするもので、たいてい正月前の1月に決まった。1月に話が決まるとすぐにキマリ酒になった。このキマリ酒から結婚式までは1年ほどある。キマリ酒の日にはチュウニンが酒2升と豆腐と鯉2匹をもって、嫁の家に行く。その時にはチュウニンは夫婦で

行き、婿も一緒に行く。嫁方の家では、話が決まるまでは仲人と婿は茶も飲まずにいる。嫁方から承諾を得て、話が決まると酒を飲んで祝宴になる。その時には嫁方の親戚も集まっている。その日のうちに仲人と婿は嫁を連れて、婿の家に帰る。婿方の家でも「迎え酒」といって、親戚が集まって祝宴をする。それから3日間は嫁は、婿の家に泊まって、その後一人で生家に帰る。それから、シュウゲンまでの間は嫁も婿もイツタリキタリして、互いの家の仕事を手伝った。嫁を婿が夕方迎えに行き、次の日に朝飯を食べて帰ることもあった。シュウゲンは翌年の2月だった。

結婚したときには、夫の親夫婦ときょうだいがまだ家にいた。それから男3人の兄弟のうち2人が同じ村の中にイモチ（分家）した。姉妹のうち3人が村内に嫁にいつている。シュウゲンがすんでから、嫁の生家に毎晩ではないが、1週間に半分位はいっしょにでかけていった。これを「アソビニユク」といった。嫁の家にも、とくに仕事をするわけでもなく、お茶を飲んだり話をしたりするだけだった。子どもが生まれるとその子どもたちも連れて遊びに行った。一番下の子どもが生まれる頃までは遊びに行っていたが、嫁の親たちが死んでしまうともうあまり行かなくなった。嫁に来てすぐの頃の方が頻繁に行っていた。嫁の家では大切にされて、少しも堅苦しいということはない。セケン（よその村）ならば緊張することもあるだろうが、同じ村の中なのでそんなことはない。婿の方の母親には黙ってでかけたし、むしろ母親の方から「行ってこい」と言われた。嫁の姉妹も同じ村の中に嫁に行っていたが、遊びに行き嫁の家でその夫婦と会うということはない。

他には、正月の2日に嫁の家に行った。結婚してから5、6年は夫婦ででかけた。婿の家からは酒をもって行く。そのときにはその家から嫁にでた娘たちが皆夫婦で集まる。その家の跡取りは、帰ってきた姉妹夫婦に挨拶だけして、自分の嫁の家に行ってしまった。嫁だけが生家に帰ることもある。2月1日には、だんごを婚家で作ってもらって、子どもを連れて嫁が生家に帰った。3月3日の節句には菱形の餅をついて、それを子どもに背負わせて生家に帰った。

子どもは娘ばかりだったので、長女に婿をとった。「本人同士がよいといえばよいのでは」と思った。チュウニン（よその村）の叔父に頼んだ。婿は同じ村の人で、6人きょうだいの4男だった。結婚したときには、他の娘たちはまだ嫁にいつていなかったが、今はよその土地に婚出している。話が定まってキマリ酒をしてからは、婿の家に娘はよく手伝いにいつていた。婿は出稼ぎにいつていたので、こっちの家の手伝いはほとんどしなかった。結婚してからは、娘も婿といっしょによく婿の家に遊びにいつた。夫婦してほとんど毎日のように遊びに行っていた。子どもが生まれてからも、連れて遊びにいつていた。

跡取りの孫の仲人は婿の妹夫婦に頼んだ。今は夫婦3組とで4世代がいっしょに暮らしている。

(3) 事例3 明治42年生れ 女性

結婚の相手は学校の先生がこれがよいのではないかと言ったし、親たちもよいとっていたので、18歳でキマリ酒になった。夫は20歳だった。キマリ酒の日には、仲人と婿が嫁方に行き、嫁方から承諾がえられると、そこで酒を飲んで、婿方から持ってきた豆腐を残さないように食べた。その後嫁は親たちといっしょに婿の家に行って、嫁だけ2日泊まって、3日目に嫁は実家に帰る。キマリ酒がすんでからは、イツタリキタリをする。昼間は嫁は自分の家で仕事をして、夕方に婿が嫁を迎えにきて、嫁は婿の家に泊まりにいった。婿は兵隊にいていたので、キマリザケをしてから4年目にシュウゲンになった。シュウゲンの前に子どもが生まれたら、その子の面倒は嫁の実家でみる。

シュウゲンの日には、仲人が嫁の家に迎えに行く。その時には樽かつぎが魚と酒2升をもっていき、嫁は婿方から送られた黒い着物を着る。その時の着物の紋は、いったとこの(婚家)の紋をつける。二日目には嫁方から持ってきた着物を着る。着物はできるだけたくさん持って行く。働く時の着物もみんな実家からもってくる。嫁入り道具は、たんすと布団1組と着物と竹行李をもってきた。結納はなかった。嫁の方から嫁入り道具をたくさん担いで、婿の家にむかった。

嫁は自分の実家をバーベエという。嫁に来てからは、バーベエにはふだんはあまり遊びには行かなかった。こっちの仕事が忙しくて、あまりバーベエには行けなかった。たんぼのあるときにはそれで忙しいし、夜は着物を繕ったりしなくてはならないので、とても実家へ帰っている余裕はなかった。その家によって違うだろうが、ほとんどバーベエに遊びには行けなかった。子どもたちの世代には、わりと実家に遊びに行くことも多かったようだ。それもその家による。分家した家の嫁は、ほとんどバーベエには遊びにはいかない。

正月には2日にバーベエにいった。夫と子どももいっしょに帰った。嫁入りしてから3年間は、餅を2つ作ってくれて、それを重ねて、酒ももって帰った。4年目からは餅は持って行かなかったが、正月には実家にいった。その時も実家に泊まってはこない。

2月1日には、婚家で大きなだんごを7つ作ってもらって、それをかついで実家に帰った。子どもも連れていった。子どもたちもバーベエに行けるととても喜んでいた。

3月3日の節句の日にもバーベエに帰った。その時は、菱形の餅を3つ重ねてもっていった。草もちと栃餅と白い餅とを3つ重ねて持って帰った。そのときは婿はいかずに、嫁と子どもだけでいった。その日はバーベエで甘酒を飲んで遊んで来た。この時もバーベエには泊まらない。嫁に来てからバーベエに泊まったことなんかない。

盆には酒とスルメと茶を婚家で用意してくれたものを持って、実家にいった。その頃は素麺も用意してくれて持って帰った。彼岸は、春と秋の彼岸のときには酒1升と豆腐2丁をもっていった。豆腐は重箱に入れていった。

村のやすみの日があって、その日には自分だけで働きにいて、そこで稼いだもので子どもの

ものを買った。正月には新しい着物を、盆には下着を婚家で作ってくれた。嫁入りしてからは、実家に何かを作ってもらうことはなかった。

出産はシュウゲンしてからは、みんなこっちで産んだ。産婆さんがいない頃には上手な人に取り上げてもらった。産まれる日までたんぼで働いていた。産後21日はおかゆを食べて家にいたが、それを過ぎると仕事にいった。

5. 分 析

以上のように、高根における生家訪問は行われていた。婚出した女性とその生家との関係はこれまで検討されてきたが、それは婚家と生家をつなぐという視点からの分析であった。確かに、女性を媒体として二つの家が結び付けられることとなり、そこに新しい関係が成立し、ときには社会的に意味をもつものとなっていた。ところが、高根で行われていたような生家訪問は、非常に頻繁に行われ、しかも夫である婿を伴うものであったが、それは家間の関係というよりは、むしろ個人的な関係のように見える。ここでは、その生家訪問の特徴を述べるとともに、日本社会において行われていた他の生家訪問との比較を行う。

日本社会においては、「家」制度の中で他家に婚入した者は、婚家において当初は一人よそ者の感は否めない。さらに、農村においては嫁となった女性には一家の労働力としての期待が大きかった。現在とは違う機械化されない労働は大変きついものであり、当時を語る人々は皆その辛さを伝えている。高根においても、女性たちは昼間の辛い労働の後、生家にでかけてそこで生家の両親と話をしたり、くつろぐことは骨休めになった、と語るのである。確かに、婚家の新しいメンバーとなったばかりの嫁にとって、生家は婚家より「気楽な」所であり、「心安い」場所であった。日本全国で行われていた里帰りという嫁の生家訪問は、嫁である女性の骨休めを目的としていたものも多い。しかし、どこの嫁たちも婚家でのきつい労働の中で、生家に帰りたい、生家で休みたいと思ったはずである。その中で、高根の嫁たちは生家で休むことを婚家の人々からも認められ、堂々と生家を訪問していた。さらに、毎晩のようにと非常に頻繁で、生家での滞在時間が長いものである。

その上、夫も伴っての訪問である。夫は婚家においては跡取りの地位にあり、「家」の中では最も重視される関係である親子関係が嫁の生家訪問の折にはとぎれることになる。つまり、他家の嫁として婚出させた娘がその夫とともに戻ってきて、自らの家の跡取りが嫁とともにその生家を訪問することになる。「アソビニユク」が行われているときには家族のメンバーの変化が生じているのである。生家にアソビニユクして婚家に戻ったときに、まだそこから婚出した娘夫婦が帰らずにいるときには少し遠慮して家に入ったとも言われている。

一般的に里帰りと呼ばれる慣行は、女性を中心に語られてきた。日本海沿岸地域を中心に比較

的広範囲にわたって見られる婚出女性の生家訪問に、「センダクガエリ」と呼ばれるものがある。季節的に数十日という長期にわたって嫁が生家を訪問し、そこで嫁と子どもたちの衣類や布団の調達や調整を行うことを目的とするものである。この慣行も生家滞在時間の長い嫁として注目されてきた。しかし、「センダクガエリ」に嫁の夫たちはほとんど関与しない。むしろ、嫁が生家に滞在している間は夫は嫁を訪ねるべきではないとする地域も多い。この「センダクガエリ」を行う場合にも、嫁の生家と婚家との家族のメンバーに変化が生じる。ただし、それは婚出した女性だけが、ときには子どもを伴うことはあるが生家を訪問するのであるから、嫁の生家では女性が婚出する前の血縁によって結ばれた家族が誕生するのである。つまり、嫁である女性の移動により家族の形が変化するわけであるが、結果として婚出した女性と生家の親との親子関係が強調されることになる。さらに「センダクガエリ」の場合には、夫である婚家の跡取りとその親との親子関係は婚家ではそのままの形で維持される。そのように親子関係が強調されるのに対して、嫁とその夫との夫婦関係はむしろ重視されないことになる。一般的にも嫁となった女性が生家を訪問する場合には、夫との夫婦関係を一時的に切ることになるが、ここで取り上げた「アソビニユク」の場合には、嫁が生家訪問に夫を伴うことにより逆に夫婦関係が強調されているといえよう。

また、「センダクガエリ」を行う嫁たちは、生家に帰っている間に自分の着物や布団を作るよう婚家から期待されている。その際には形式的には婚家から滞在中の食い扶持として米などを持たされることもあったが、大抵それは十分とは言えず、ほとんどが生家の負担となった。つまり、経済的にも生家の負担は重く、嫁にとって生家は経済的な意味でも重要な存在であった。それに対して「アソビニユク」を行う地域においては、生家がとくに経済的に嫁として婚出させた女性の何かを負担をすることはない。生家に遊びにきているときも、いっしょにお茶を飲みながら話をするくらいで、生家から婚家へ何かを持ち帰るといってもいい。

婚出した女性が頻繁にその生家と婚家を往来すると、二つの家間の関係は密接なものとなる。伝統的な日本社会において婚姻とは一人の女性の生家から婚家への帰属の変更ともいわれるように、婚姻が成立することによって二つの家が関係をもつことになる。この二つの家は村内においては「近い親戚」として認識され、儀礼的な結び付きも強い。その上、夫とともに頻繁な往来がなされるのであるから、より親しいものとなる。高根では嫁は自分の生家を「バーベエ」といい、夫や子どもたちもそう呼ぶ。「アソビニユク」と同じような慣習をもつ山形県越沢では母親の生家を「マゴノイエ」と言い、後にはその家の跡取りの仲人を依頼する家となる。しかし、「バーベエ」などの嫁の生家との関係は、そこから婚出してきた女性たちの存在とともにあり、世代を越えることはない。子どもたちにとっては幼い頃頻繁に訪問した母方の祖父母との関係は、成長後も大切なものとして存在するものである。これはいわゆる外孫との関係ということになり、婚出させた娘との関係の延長上にあるといえよう。

以上のように、「アソビニユク」といわれる婚出女性の生家訪問の特徴が考えられるが、あくまでもこれは婚出した女性の帰属は婚家へと変更されてからのものである。婚姻儀礼も婿方で行われ、嫁の引き移りも婚礼と同時に行われている。そして、嫁の生家の経済的負担という要素も少ない。さらに、嫁の生家訪問に夫を伴うということから、夫婦関係の強調という点があげられる。日本社会においては、「家」制度の中で直系家族を形成するためにより親子関係が強調されるものとされてきたが、高根のように夫婦関係を大切にするような家族も存在していた。さらに、本来「家」制度の中では見落とされてきた婚出女性と生家の親との親子関係の強調も見られる。これらは「家」の原理である永続性と超世代性と相反するようにみえるものであるが、この親と娘との親子関係も現実の生活の中では重要な意味をもつものであったといえよう。これまで婚出と同時に断たれるものと考えられてきた女性とその親との関係ではあるが、それらを含めた上で、日本の家族についての考察が必要と思われる。

(註)

- (1) 新潟県朝日村高根における調査は1992年、1993年に行ったものである。
- (2) この慣行は「シュウトノツトメ」とも呼ばれ、近接する山形県温海町やその周辺地域にもみられる。
- (3) たとえば、海女などのように特殊な技能をもつ女性の労働力は生家・婚家双方にとって貴重なものであったため、その分配についての規則が決められることも多かった。
- (4) 福井県若狭地方や石川県能登島などに見られる。
- (5) 季節的に年に1回から数回にわたって嫁が生家に帰り、そこで数日から数十日滞在する里帰り慣行が日本海沿岸地域を中心に比較的広範囲にわたって見られる。
- (6) 嫁の道具はこのときに全部婿方に運び込まれ、後に別に届けられるということはない。

<参考文献>

- 新潟県朝日村 (1991) 『朝日村のすがた平成3年』新潟県朝日村
- 新潟県朝日村教育委員会編 (1978) 『朝日村の民俗』新潟県岩船郡朝日村教育委員会
- 蒲生 正男 (1970) 「日本の伝統的家族の一考察」『民族学からみた日本』河出書房
- 長谷川昭彦 (1965) 「嫁の長期里帰り慣行の社会的意義—小浜市国富地区を主として」『人文』(京都府立大学) 7
- 林 研三 (1992) 「婚姻慣行と家結合—母の生家をめぐる事例分析」『現代法社会学の諸問題』早稲田大学出版部
- 姫岡勤他編 (1973) 『むらの家族』ミネルヴァ書房
- 中込 睦子 (1987) 「若狭地方における嫁の「里帰り」と家族の構造」『史潮』新21
- (1992) 「位牌分けと祖先観—群馬県中之条町寺社原の位牌祭祀」『国立歴史民俗博物館研究報告第41集』

- 大間知篤三 (1958) 「婚姻」『日本民俗学体系』
- 佐藤 光民 (1956) 「羽越国境地方の婚姻制—シュウトノツトメを中心として」『日本民俗学』 3-4
- 瀬川 清子 (1957) 「嫁の里帰り」『婚姻覚書』講談社
- 清水 昭俊 (1979) 「家」『仲間』(ふおろく叢書9) 弘文堂
- 蓼沼 康子 (1994) 「日本海沿岸地域における婚出女性の娘としての意味」『城西大学女子短期大学部紀要』 11-1
- 植野弘子編 (1994) 『日本の家族における既婚女性の娘としての意味—親と娘に関する文化人類学的研究』(平成5年度科学研究補助金研究成果報告書)
- 上野和男編 (1986) 『若狭国富村落社会の構造』(明治大学政経学部ゼミナール報告18)
- 八木 透 (1994) 「シュウトノツトメと家族慣行—南庄内および越後北部山村の事例を中心として—」
原泰根編『民俗のこころを探る』初芝文庫